狸伝説は多様なジャンルで作品化されてきた。以下に主な領域を挙げる。

① **小説・戯曲**

物語性を創造・再構成する媒体として小説や戯曲はきわめて優れている。代表例として、

・井上ひさし「腹鼓記」
・太宰治「カチカチ山」（『お伽草子』所収）
・井伏鱒二「多甚古村」
・田中貢太郎「狸と俳人」などが挙げられる。

② **民話集・昔話集**

民俗学的資料として多数存在するため、本稿では詳細は割愛する。

③ **映像・講談**

明治後期、大阪の神田伯龍が狸伝説を講談として舞台で披露し、都会の芸能として全国的に流布した。速記本として

・「実説古狸合戦」
・「古狸奇談津田浦大決戦」
・「古狸奇談日開野弔い合戦」（1910 年）などが刊行されている。また、伊予松山の隠神刑部を描いた「松山狸問答」も同時期の作品である。

④ **音楽**

童謡や地域の祭礼音楽など、狸を題材とした楽曲が多数存在する。

3-3-3　著名な作品例

●井上ひさし「腹鼓記」の高い物語性

井上ひさしの「腹鼓記」（※参考文献）は、民話的モチーフを現代戯曲的・文学的文脈で再構成した作品あり、伝統的な動物譚を人間社会の寓話へと転化する手法が特徴である。狸は単なる化け物や娯楽的素材ではなく、人間の欲望や共同体の規範を映す鏡として扱われ、観客や読者に笑いと同時に倫理的省察を促す。井上の翻案は口承の素朴な語りを文学的に精緻化し、地域伝承を都市的観客層へ接続した点で重要である。結果として、狸譚は現代的社会批評の媒体として再評価され、舞台再演や教材化を通じて新たな伝承経路を獲得した。

●太宰治「カチカチ山」ほか昔話翻案

太宰治の昔話翻案群（『お伽草子』は、古典的民話を近代的感性で再読する試みとして知られる。「カチカチ山」では残酷な復讐譚の倫理的含意や登場人物の内面を強調し、善悪二元論を揺さぶる。狸は被害者・加害者の二面性を帯びた存在として描かれ、物語の暴力性や因果応報の論理が読者に問いを投げかける。太宰の筆致は物語の暗部を抉り出し、児童向け改作とは異なる大人向けの寓話性を付与した。こうした翻案は民話研究や文学史の文脈で重要な位置を占める。

●井伏鱒二「多甚古村」における狸の登場

「多甚古村」は徳島市内（ならびに吉野川流域）を舞台とし、駐在巡査の日記風記録として村の日常を描く。その中の「狂人と狸と家計簿」では、村の騒動が迷信や噂話と結びつき、「狸が化かしたのではないか」という民俗的説明が持ち込まれる。井伏は民俗を体系化せず、断片的な噂・逸話の積み重ねとして提示することで、民俗を流動的な共同体の語りとして描く。また狸は象徴ではなく「出来事を説明するための機能的存在」として扱われ、民俗的思考の構造を浮かび上がらせている。徳島を舞台としながら十分に評価されていない点で「埋もれた文化資源」と言えるため、本稿では本作品についてやや詳しく言及したい。伝承に「物語性」を与え育むための一つの手法が示されていると考えるからである。

・第１に、民俗を「語りの断片」として扱う構造性の面白さ：井伏は民俗を体系化せず、断片的な噂・逸話・小事件の積み重ねとして提示する。これにより、民俗は固定された伝統ではなく、流動し続ける共同体の語りのネットワークとして描かれる。
・第２に、民俗的存在（狸・狐・怪異）を“象徴”ではなく“機能”として描く面白さ：井伏は狸や狐を象徴的に扱うよりも、村の出来事を説明するための機能的存在として描く。 狸は単なる「化かす存在」ではな

く、村人の語りの中で出来事を整理するための“便利な原因”として登場するのである。

●『平成狸合戦ぽんぽこ』（スタジオジブリ、1994年）による映像化

高畑勲監督の「平成狸合戦ぽんぽこ」は、都市化と環境破壊を背景に、狸たちの生存闘争と文化的抵抗を描いたアニメーション映画である。化け術や合戦譚の伝統を踏襲しつつ、現代社会への風刺と哀感を織り込み、狸を共同体の象徴として描く。映画は国内外で高い評価を受け、狸伝説の現代的再解釈として広く参照されている。結果として、狸文化は映像メディアを通じて全国的認知を得ると同時に、地域振興や環境教育の題材としても活用される契機を生んだ。

3-3-4　作品化による文化資源の開花

井上ひさしの作品、太宰の翻案、井伏鱒二の小説、そして高畑勲のアニメに共通するのは、口承の再現を超えて物語を再構成し、受容の場と意味を変換する技法である。

- 第一に、**物語の凝縮と再語り**：口承の冗長さや地域限定性を、戯曲・短編・映画という形式に合わせて選択的に編集し、普遍的主題（共同体の喪失、復讐と赦し、環境破壊など）へ焦点化する。
- 第二に、**倫理的・感情的再評価**：太宰は残酷譚の道徳的含意を掘り下げ、井上は喜劇的装置で社会的矛盾を露わにし、高畑は環境批評と哀感を重ねることで、狸を倫理的・政治的寓意へと転化した。
- 第三に、**メディア固有の表現技法の活用**：舞台や戯曲は身体性と即時性で共同体的反応を引き出し、短編小説は内面描写で読者の省察を促し、アニメーションは視覚的メタファーと音楽で感情的共鳴を拡張する。
- 第四に、**受容層の拡大**：地域内の語り手から全国的・国際的観客へと物語を移し、教育・観光・環境運動など多様な実践領域と結びつけた。

これらの作品は、伝承の保存と創造的改変を両立させた点で文化資源としての価値を高めた。狸譚は形式的再構築（編集・翻案・映像化）を通じて現代的問題意識と結びつき、芸術作品としての独自性と社会的有用性を獲得したのである。

この視点からすれば、伝説を活用する地域振興は単なる観光化ではなく、物語の意味を再考し得る創造的介入を伴うべきだという示唆が得られる。

3-4　狸祭りの成立・現在・未来

「狸王国」徳島が、狸譚を背景に地域づくりイベントとして展開し、半世紀近く持続可能（サステナブル）に継続してきた最大の事例が「ふるさとカーニバル・阿波の狸まつり」である。1978年に始まり、まもなく50年を迎えるこの祭りは、徳島の狸文化力を象徴する取り組みである。本節では、主に「豆狸通信40年史」を参照



資料：徳島市にぎわい交流課HP

しつつ、狸まつりの歴史・運営・来訪者傾向・未来の可能性を文化力の観点から考察する。

3-4-1 「狸まつり」の歴史

「狸をまつる」という行為は、地域伝承・宗教行事・商業的催事が交錯して成立した複合的文化現象である。その起源は、金長狸や阿波狸合戦の伝説が地名・寺社信仰と結びつき、年中行事の周縁で語られてきた口承文化に求められる。

近代以降、地方自治体や郷土史家が伝承の顕彰を目的に狸譚を「祭礼化」し、地域アイデンティティを可視化する場として制度化した。戦後の復興期には、地域振興・観光振興の文脈で狸をモチーフとした行事が拡大し、昭和末期から平成にかけては商店街・青年団・文化団体が参加する複合イベントへと発展した。

「阿波の狸まつり」もこの流れの中に位置づけられる。伝承は口承の保存装置であると同時に、地域のために創造的に利用される場を提供したのである。

3-4-2 「狸まつり」運営の特徴

当事者でない立場から運営全体を評価することには慎重であるべきだが、「豆狸通信 40 年史」（ならびに広報誌『豆狸便り』等）から読み取れる主な特徴を整理すると、以下の通りである。

① **圧倒的な集客力**：初期には述べ 46 万人が来場した記録がある。2026 年の阿波おどりの人出は 114 万人と推計されているが、阿波おどりが全国的ブランドであることを考えれば、その半数近くに迫る集客力を示した「狸まつり」のポ

「豆狸通信」に見る「狸まつり」の略史

通信番号	発行日	延べ参加人数	世話人代表	実行委員長	常任実行委員	実行委員	露店部会	事務局	事項
1	S53.10		松村益二						祠（39 ヶ所）の整備（案内板や幟等々）オリエンテーリングシステム造り／四国放送「四国狸列伝」
3	日付無		松村益二						徳島の祭から日本の祭へ日本の祭から世界の祭へ（エッセイ）
4	S55.12	46 万人（第 3 回）							三木みのる「阿波の狸囃」の作曲／世界の TV に配信・葡の外交官挨拶
9	S61.9		石川良彦	三木市長	9	56			実行委員会立ち上げ・通信に役員名を掲載／松村益二氏の理念の確認「古今の文化を融合させる人間都市作り・精神的母体を持ったのが成功の因」
10	S62.1	37 万人（第 9 回）							第9回に自動車スバルレックスの福引景品が評判になる。／宮沢光顕「狸の話」
12	S63.1	26 万人（第 10 回）	石川良彦						第 10 回に阿波っ子児童画展
13	S63.10		石川良彦		9	53		13	第 11 回は昭和天皇の御容態で中止／オリエンテーリングは実施するもこのころから減少傾向が報告される
26	H13.9				8	46+5	9+3		露店部会が設置される。／奉賛会の実行委員んを別途記入するようになる
27	H14.9				9	46+5	9+4		エッセイとして「阿波の狸まつりあれこれ」に狸祭りの生い立ちが記載・以後エッセイが通信裏面の主流
50	R7.9	14 万人（四国放送 HP）	徳島県警友連合会会長	石川裕資	9	36+9	7+4		エッセイで祭りの意味を考えることが提起される

資料：「豆狸通信」をもとに筆者作成

テンシャルは極めて大きい。

② 行政の発案と民間への委譲：発端は徳島市観光課が阿波おどり以外の観光資源開発を模索し、昭和 53 年（1978 年）頃に「狸まつり」を発案したことにある。当時、行政が「狸」を扱うことへの抵抗感（迷信・因習視）もあり、四国放送社長・松村益二氏へ事務局委託が要請された。これが「阿波の狸奉賛会」設立へとつながり、現在の主催者グループが形成された。なお、祠巡りの企画時に「祠に狸がいると娘の縁談に差し障る」と反対されたという逸話は、伝説が近代以降に迷信として排斥されつつも、現代では文化資源として再評価される過程を象徴している。

③ 自治体・公共団体を含む強固な協力体制

「豆狸通信」の記録によれば、実行委員会名簿には

・徳島県知事
・徳島市長
・商工団体
・メディア各社

などが名誉顧問・顧問として名を連ねており、地域イベントとしての協力体制が極めて強固であることを示している。実行委員は奉賛会メンバーを含め多数で構成され、地域の多様な主体が関わる「協働型イベント」として成熟している。

④ 露店推進部会の設置

第 26 号以降の記録には「阿波の狸まつり露店推進部会」が登場し、飲食・物販の企画管理を担っている。総合イベントとしての運営体制が着実に整備されていったことがうかがえる。

⑤ 中止はわずか 3 回

昭和天皇のご容体悪化時（第 11 回）と、コロナ禍に見舞われた 2020 年・2021 年の計 3 回のみが中止となっている。この長期継続性そのものが、地域における文化力の高さを示す証左といえる。

⑥ 最新の来場者数

第 48 回（2025 年）は 2 日間で約 14 万人が訪れた。家族連れが多く、地域イベントとして安定した支持を得ている。近年の人口減少や高齢化・過疎化を考慮しても、当初示したような高い集客ポテンシャルを今なお秘めていると推察される。

3-4-3　来訪者の傾向とイベント構造

「狸まつり」のように伝説・伝承を淵源とするイベントは、

・精神的側面（郷土愛・伝承の継承・共同体形成）
・経済的側面（観光・消費・地域産業の活性化）

の双方から評価する必要がある。特に第 1 回から継続して実施されている「狸の祠巡りオリエンテーリング」は、地域の文化力向上という精神的側面を象徴する企画である。また近年行われている「紙芝居」の上演も、こうした伝承活動のポテンシャルを強く感じさせる。



資料：祠めぐりオリエンテーリング作成パンフ

● **来訪者の二層構造**

1. 地元住民（参加型）

・祭礼の準備・運営・参加を通じて共同体の結束を再確認する。

・子どもや若者の参加は伝承継承の重要な経路となり、文化力の側面に直結する。

2. 外部観光客（消費型）

・週末観光、家族連れ、イベント参加を目的とする層である。

・SNSや観光パンフレットが来訪動機に影響を与え、経済的側に直結する。

● **イベント構造**

「狸祠巡りオリエンテーリング」は第１回から続く伝統企画であり、七福神巡りとオリエンテーリングの娯楽性を融合させた「風土文化体験型イベント」として高く評価できる。

メインプログラムは多岐にわたり、以下の催しが行われている。

・オープニング式典

・プロタレントのステージ

・地域芸術団体の公演

・プロ歌手を目指すためのオーデション

・紙芝居（狸伝説を題材としたもの。奉賛会が注力しており、人気が高い）

さらに会場内では、

・子ども向けワークショップ（狸のお面づくりなど）

・屋台・物販ゾーンが設置され、来場者の満足度を支える重要な要素となっている。

・市町村別ブースでは県内各地の物産が販売され、地域の魅力を発信している。

3-4-4 「狸まつり」の未来

「狸まつり」は、徳島の無形文化財である狸譚を発掘し、開花・結実させる高いポテンシャルを持っている。しかし来場者数は初期のピーク時と比べると減少傾向にあり、パンデミックによる中断の影響も残る。ここでは文化力と経済的側面の両面から未来を展望したい。

最新号である「豆狸通信」50 号に掲載された長浜太造氏のエッセイ「『阿波の狸合戦』を語り継ぐということ」には、次のような指摘がある。

「ふるさとカーニバル　阿波の狸まつり」は、文化人類学の視点から見れば“創られた伝統”である。地域の歴史や文化を意図的に再編成し、現代の目的に合わせて創り出された文化実践にほかならない。 1978 年に始まったこの祭りは、地域振興や観光客誘致という目的を持ち、誰もが楽しめるエンターテインメント性の高いイベントとして設計された。この祭りは徳島のシンボルである「たぬき」と「阿波狸合戦」の伝説を巧みに結びつけることで、地域のアイデンティティを強化し、次世代に伝承する装置として機能している。

この指摘は、「狸まつり」が

・**地域文化力（郷土愛・共同体形成）**

・**世代間交流（継承の装置）**

・**観光資源（経済的価値）**を同時に担う複合的文化実践であることを端的に示している。

地域文化力を強化する基盤は、郷土愛と人々の絆である。「狸まつり」は、民話や伝説を現代的文脈に再接続し、地域の物語を未来へと橋渡しする「創造的伝統」として、今後もさらなる発展の余地を大いに残しているといえよう。

3-5　食文化における狸ブランド

3-5-1　金長まんじゅうの例

徳島・鳴門地域の狸伝説は、地域の食文化にも深く浸透している。その代表例が、徳島銘菓として全国的に知られる「金長まんじゅう」である。「金長まんじゅう」は徳島県小松島市に創業の地を持つ製菓会社ハレルヤによって発売された。金長狸の物語を商品名に冠したこの菓子は、単なる土産物にとどまらず、地域の物語を食文化として定着させた象徴的存在であり、金長狸の世界観を現代的に再解釈したシリーズとして発展を遂げてきた。興味深いのは、「金長まんじゅう」の発売以降、金長狸が徳島の象徴的キャラクターとして広く認知されるようにな

り、物語自体の知名度も高まったことである。つまり、菓子という「食文化」が物語の普及を促し、物語が菓子のブランド価値を高めるという相互強化作用が生じているのである。

このように、徳島の狸文化は寺社・祠・地名・碑文といった伝統的文化資源に加え、菓子という日常的な消費物を通じて生活文化に深く浸透している。物語性を帯びた菓子文化は地域文化力を高める重要な要素であり、観光や地域ブランド化の観点からも大きな可能性を持つ。「金長まんじゅう」は、徳島の狸伝説が「食べられる文化資源」として現代に生き続けていることを示す好例である。

3-5-2　物語ブランドの文化史――物語資源が商品文化へ転換する過程

● 金長ブランドの出発点

金長ブランドの出発点は、昭和 12 年（1937 年）にハレルヤが発売した「金長まんじゅう」である。チョコレート風味の皮に白あんを包む独自の製法は当時として斬新であり、発売直後から人気を博した。パッケージには金長狸の姿が描かれ、由緒や物語を説明する文が添えられることも多かった。これにより、菓子を手に取る人々は自然と金長狸の物語に触れ、菓子が物語の普及装置として機能した。「金長まんじゅう」は、徳島の狸文化を「食文化」として定着させる画期的な商品であったといえる。

● ブランドの拡張――金長ゴールド、かすていら、プレミアム

ハレルヤはその後、金長ブランドを積極的に拡張した。昭和後期には「金長ゴールド」が発売され、ホワイトチョコ風味の皮と白あんの組み合わせが広く人気を集めた。さらに「金長かすていら」「プレミアム金長まんじゅう」など、ブランドの多層化が進む。ブランドの拡張は、物語の普及と商品文化の発展が相互に作用する典型例である。

● 現代的再解釈――「たぬきのほっぺ」の登場

近年、ハレルヤは「たぬきのほっぺ」を発売し、金長ブランドの現代的再解釈を進めている。もちもちとした生地に「なると金時芋ミルク餡」を包んだこの菓子は、金長狸の世界観を柔らかく継承しつつ、現代の嗜好に合わせた味覚設計が特徴である。ここで注目すべきは、金長ブランドが単なる伝統菓子ではなく、地域文化を現代の消費文化に接続する能動的ブランドとして機能している点である。物語資源を継承しながら新しい商品を生み出すことで、ブランドは世代を超えて更新され続ける。

3-5-3　金長ブランドの文化史的意義

金長ブランドの文化史的意義は、以下の三点に整理できる。

1. **物語資源の商品化による文化の普及**：「金長まんじゅう」は、金長狸の物語を広く浸透・普及させる媒体装置として機能した。
2. **地域文化力の向上**：金長ブランドは徳島の地域文化を象徴する存在となり、観光・地域ブランド化の推進に大きく寄与した。
3. **無形文化資源の経済化**：物語性を帯びたキャラクターや伝承を商品化することで、地域の無形文化が持続可能な経済資源として活用された。

金長ブランドは、狸文化が食に関係した一例に過ぎないが、地域文化が商品文化へ転換する過程を示す典型例であり、民俗学や文化経済学の観点からも重要な研究対象となる。地域伝承を活用したブランド構築に関する研究は、商業的・産業的観点からも今後一層進められてよいであろう。

第 4 章　地域文化力の開花に向けて

4-1　まとめ

本稿では、地域文化力を「文化資源が社会的価値として開花・結実した状態」と捉え、徳島県の狸譚が無形文化財として高い潜在力を有することを示した。伝説は、神話層から現代創作

層まで多重の構造を持ち、再話・制度化・メディア化を通じて意味を更新し続ける動態的資源である。この多層性こそが、伝説を地域文化力へと転換する際の柔軟性と持続性を支えている。

徳島の狸譚は、地名・寺社・祠・史跡・文学・映像・祭礼・食文化といった多様な領域に浸透し、地域の象徴として機能してきた。阿波狸合戦の物語性、金長狸のキャラクター性、狸まつりの制度化、金長ブランドの商品文化化など、複数の層が相互に作用しながら文化力を形成している。これらの事例は、地域文化力が自然発生的に成立するのではなく、地域主体による「育成」「編集」「発信」の連続的プロセスによって初めて社会的価値として定着することを示している。

4-2　地域文化力向上への提言

徳島県の狸譚を地域文化力としてさらに結実させるためには、伝説の多重構造を活かしつつ、現代的な制度化・イベント化・物語編集を戦略的に行う必要がある。以下に、現状から着手可能な四つの具体施策を提案する。

①「狸サミット」の開催（『狸まつり』の一環として）

全国の狸伝説を有する地域（香川・愛媛・滋賀・佐賀など）を徳島に招き、研究者・語り部・自治体・観光団体が交流する文化フォーラムを開催する。伝説の多重構造は地域ごとに異なるため、比較研究や語りの交換は新たな再話を生み、現代創作層の活性化につながる。「阿波の狸まつり」の一環として実施することで、祭礼の文化的厚みが増し、徳島が「全国の狸文化の中心地」であるというブランドを確固たるものにできる。

②「狸文学賞」（『とくしま文学賞』の特別枠）

文学は伝説の近代再話層を形成する重要な媒体である。狸譚は物語性が高く、短編小説・児童文学・漫画原作など多様なジャンルでの展開が可能である。「とくしま文学賞」に「狸文学賞」という特別部門を設けることで、現代創作層を意図的に育成し、伝説の再話を促進できる。受賞作を「狸まつり」等の場で朗読・展示することにより、文学活動と地域イベントが連動し、文化力の循環構造が生まれる。

③「狸オリエンテーリング」の拡充

狸譚は地名・社寺・史跡と結びついているため、フィールドワーク型の文化体験と極めて相性が良い。「狸オリエンテーリング」は、参加者が市街地や郊外の狸ゆかりのスポットを巡り、伝説の多層構造を身体的に体感する仕組みである。デジタルスタンプラリーやAR（拡張現実）ガイドを導入すれば、現代創作層との接続が強まり、若年層やファミリー層の参加も期待できる。地域の回遊性を高め、観光と文化教育を同時に実現する施策として有効である。

④「狸俳句大会」の創設（オリエンテーリングおよび『狸まつり』との連動）

俳句は地域の自然・風土・物語を凝縮する伝統的表現形式であり、伝説の口承層と現代創作層を橋渡しする媒体となる。全国公募による「狸俳句大会」を創設し、「狸まつり」のステージ等で表彰を行うことで、文学・祭礼・観光を統合した独自の文化プログラムが成立する。俳句は視覚的モチーフ（狸・社寺・季節感）との親和性が高く、入選作品の展示やSNSでの発信を通じた文化力の拡散が期待できる。

提言の総合的意義

以上の四つの施策は、伝説の多重構造（神話層から現代創作層まで）をそれぞれ異なる角度から活性化し、文化資源を文化力へと転換するための体系的戦略である。学術・文学・観光・芸能・市民参加を横断することで、狸譚は単なる昔話にとどまらず、地域ブランドとして持続的に発展する文化力となり得る。本提言は、徳島県が「狸王国」として再認識されるための基盤を形成するものである。

＜参照文献・資料＞
※　笠井新也　「阿波の狸の話」 2009 年　中央公論文庫
※　毛利恵太　「日本怪異妖怪事典四国」 2023 年　笠間書院
※　下岡昭一編 「おもしろやましろたぬき話」 2017 年　四国の秘境山城大歩危妖怪村
※　辻正幸編　「狸めぐり民俗資料」 2011 年　非売品
※　藤澤衛彦編著 「阿波の伝説」 1978 年　すばる書房（名著復刻日本伝説叢書）
※　岡島隆夫　「阿波の神々と祭り」 1998 年　徳島県出版文化協会
※　鎌谷嘉喜　「阿波狸民俗資料集」 2005 年　多田印刷
※　ふるさとカーニバル実行委員会事務局 「豆狸通信四十年史」 2017 年　非売品
※　ふるさとカーニバル実行委員会・祠めぐりオリエンテーリング委員会編
「祠めぐりオリエンテーリングマップ」 2005 年　徳島市観光課・四国放送
※　高橋晋一 「『括弧狸まつり』と地域づくり」 2006 年　徳島地域文化研究第 4 号
※　武田明・守川慎一郎「阿波の伝説」 1977 年　角川書店
※　井上ひさし「腹鼓記」 1986 年　新潮社
※　太宰治「カチカチ山」（『お伽草子』所収） 1945 年　筑摩書房
※　田中貢太郎「怪奇・伝奇時代小説選集 3　新怪談集」 1999 年　春陽文庫　集中「狸と俳人」
※　井伏鱒二（いぶせますじ）「多甚古村」 1950 年　新潮文庫

＜西池氏裕氏略歴＞

1944 年生	
1974 年 4 月	川崎製鉄入社技術研究所
2000 年～ 2004 年	東京大学先端科学技術センター客員研究員
2006 年 4 月	財団法人徳島経済研究所技術顧問（現）
2007 年 8 月	徳島県経済成長戦略アドバイザー（兼）
2008 年～	ひまわり俳句会主宰（現会長）
2011 年 9 月	徳島県教育委員長（～ 2012 年 8 月）